

紀要

■設立50周年記念号Ⅱ

円筒上層式土器における土偶意匠の展開と実態

—認識の更新と深化に向けた素描— 瀬口 眞司 (1)

滋賀県における縄文時代早期後葉～前期前葉遺跡の集成

..... 小島 孝修 (20)

はじまりのモニュメント

—縄文晩期における墓配置の一事例— 松室 孝樹 (28)

上砥山遺跡出土木製品の年輪年代測定からみた出土遺構の数値年代

..... 前田 仁暉・星野 安治・内田 保之 (35)

大津市神領所在瀬田廃寺造営過程の検討

..... 小松 葉子 (42)

八幡山城跡出土軒平瓦についての一試論

—主に製作技法・製作痕跡から— 山口 誠司 (54)

滋賀県内出土の江戸時代の化粧道具

..... 田中 咲子 (63)

長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編1＞

..... 古山明日香・福井 知樹 (68)

茶の利用についての研究ノート(1)

..... 小竹 志織 (85)

文化財の保存と活用のこれまでとこれから

—調査法人滋賀県文化財保護協会の取り組みから— 堀 真人 (91)

35

滋賀県内出土の江戸時代の化粧道具

田 中 咲 子

目次

1. はじめに
2. 江戸時代の化粧
3. 滋賀県内での化粧道具の出土例
4. おわりに

— 論 文 要 旨 —

江戸時代は、士農工商の身分制社会であった。この身分の階層性は、武家や商家・農家においてもさらに上中下層に分かれていたとされる。資料が少ないため断定はしづらいが、滋賀県内の江戸時代の商家（旅籠）・農村・上級武家屋敷・下級武家屋敷から出土した化粧（けわい）道具を通して、そこに居住した女性たちの経済的な格差の一端について、垣間見ることができた。

——— キーワード

江戸時代 化粧道具

1. はじめに

江戸時代は士農工商の身分制社会であり、この身分の階層性は武家や商家・農家においてもさらに上中下層に分かれていたとされる。すなわち、その暮らしぶりには経済的な格差があった。本稿では、当時の居住者の階層が判明している、滋賀県内の4つの遺跡において出土した化粧道具を集成し、そこに居住した女性たちの経済的な格差について考察を試みた。

2. 江戸時代の化粧

(1) 化粧道具の定義

化粧の定義には狭義と広義があり、「けしょう」と呼ぶ場合は狭義で、現在一般に理解されているように、化粧品を塗って顔を美しく魅力的に見せる行為をさしている。これに対して広義を「けわい」と言い、狭義の化粧を含めて、髪や肌の手入れ・結髪・被り物・着物などのいわゆる身嗜み、身づくろいをさしている（高橋 1988）。今回集めた資料は、化粧品を使う以外の身づくろいをするための道具や、結髪に挿した装身具を含むため、広義の「けわい」道具にあたる。

(2) 江戸時代の化粧文化

この時代は、髪が垂髪から結髪へと移行して、いわゆる日本髪が発達した。寛永～元禄年間（1624～1704）頃には、髪を結い上げるようになり、享保～安永年間（1716～1781）頃には、髪を櫛で飾ることが一般にまで広がった。

化粧品を使用した化粧の色彩としては、頬紅・口紅などの紅化粧の赤、白粉化粧の白、お歯黒や眉化粧の黒の三色があった。紅や白粉などの化粧品が安定的に市場に提供され、手に届きやすくなったのは、商工業が発達して問屋による商品流通のシステムが整えられた、元禄時代（1688～1704）頃からだと考えられている。

(3) 化粧品を使用していた女性の身分

初めて全国規模の人口調査が行われた享保6年（1721）の人口は約3000万人で、19世紀半ばまでその数字に大きな変動はなかった。階層別の人口比をみると、支配階級である武士は10%以下であり、城下町などに住んで年貢を納めない町人も少なく、大半が年貢を負担する百姓であった。

参考例を挙げると、嘉永4年（1851）の津和野藩の階級別人口は、武士7.7%・百姓88.02%・町人2.9%・えた非人0.74%・その他0.58%となっている。紅・白粉などの化粧品を毎日使用することができたのは、武士と町人であると考えられるため、当時の津和野藩で化粧品を使用していた女性の比率はわずかに10.6%であったといえる。この傾向は、近江に存在した膳所藩と彦根藩でも同様であったと考えられ、滋賀県内の遺跡から出土する化粧道具の数が少ない理由となっている。

(4) 遺跡から出土する化粧道具

発掘調査でみつかる化粧道具には、内面に紅を刷いて販売された「紅猪口」・「紅皿」、白粉を水で溶く際に使用した「段重」、髪をなでつけるのに使う水性の整髪料を入れた「鬢水入れ」、結髪を維持するために髪の表面に塗布する伽羅油のような鬢付油を保管した油壺などがある。

3. 滋賀県内での化粧道具の出土例

(1) 中畑遺跡（草津市矢倉・西矢倉・草津）（図2）

調査地点は、文献資料により、慶長19年（1614）に膳所藩主の命により、草津宿拡張のために移転させられた矢倉村があったと比定される場所である。江戸時代中期から後期頃の煎茶を主とした茶碗や土瓶が多く出土したことから、旅籠のような宿泊施設が存在したと推定されている。

化粧道具は、江戸時代末期に排水溝（出土品の大半が1820～1860年代のもの）に廃棄されたものであり、相対的に優品である肥前産磁器の碗や皿・鉢などに伴って出土している。（1・2）は、18世紀後半以降に生産が増大する、肥前産の押型成型の紅皿である。庶民でも手が届く安価な紅はこの容器に刷いて販売されていた。（3・4）は、江戸時代後期以降に出土がみられる京紅のブランド商標である、「小町紅」の容器である。外面に「京都四条遍に平小町紅」と赤絵で上絵付けされている。（5）は、肥前産の色絵染付磁器段重である。（6）は、木製の無地の横櫛である。髪を梳くために使用された。（7）は、金蒔絵を施した飾櫛である。線彫りで波に遊ぶ長寿の象徴である亀が描かれている。蒔絵は漆工芸の一種で、漆で図案を描いた上から金や銀・錫などの金属粉を蒔いて仕上げるものである。木地に蒔絵を施したものは、華やかな見栄えの割に安価であったとされる。

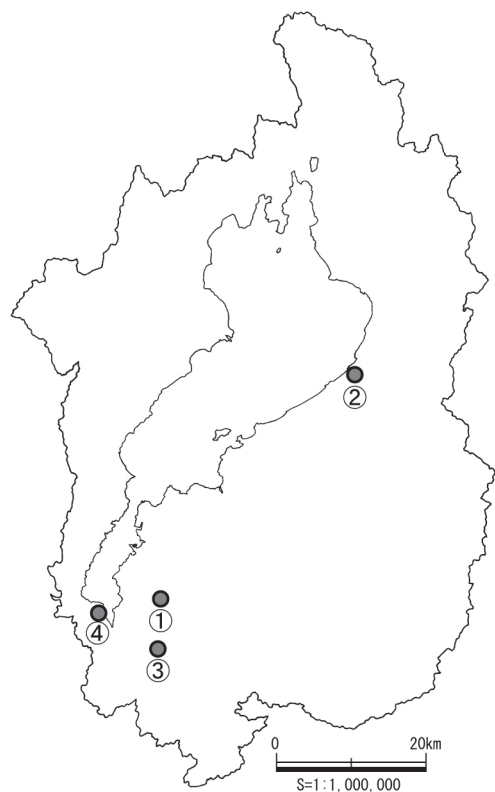
(2) 特別史跡彦根城跡（彦根市金亀町）（図2）

調査地点は彦根城の内堀と中堀の間に位置する、旧彦根藩の重臣屋敷街である。遺物は江戸時代後期から末期頃にかけてのものが多く、上級武士の生活を窺わせる多岐にわたる上級品の磁器が多く出土している。

（1～3）は、肥前産の押型成型の紅皿である。（4・5）は、外面に「小町紅京都四条辺に平」とある、小町紅の容器である。（6～9）は、色絵染付磁器段重である。（10・11）は、染付磁器油壺である。（12～20）は、ガラス製の簪である。色調は、青・緑・飴茶・透明などである。ガラス製の簪は、江戸時代末期以降に作られ、涼しい見た目から夏に使用された。

(3) 上田上牧遺跡（大津市上田上牧）（図2）

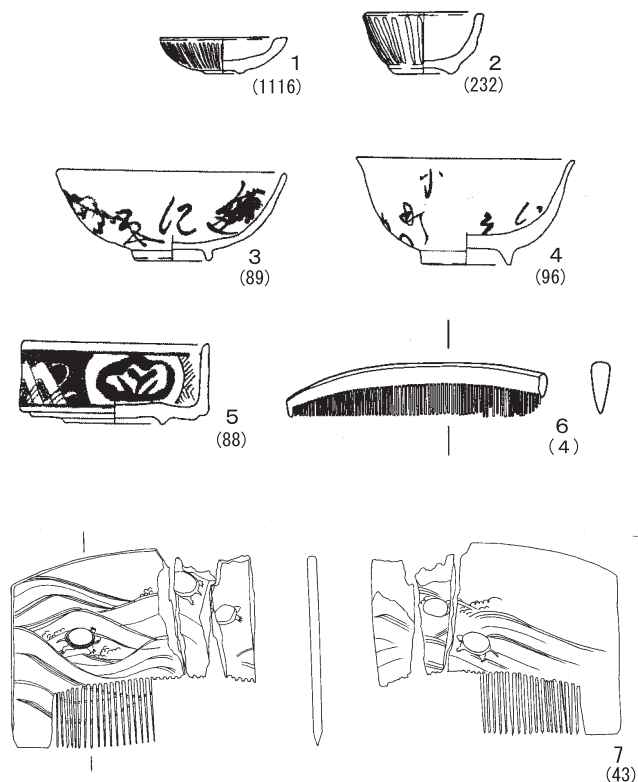
大戸川下流域の約20kmに位置する水田地帯で行われた調査では、当地に伝世している絵図などの記録に合致する、元禄年間（1688～1704）から天明8年（1788）にかけて、川沿



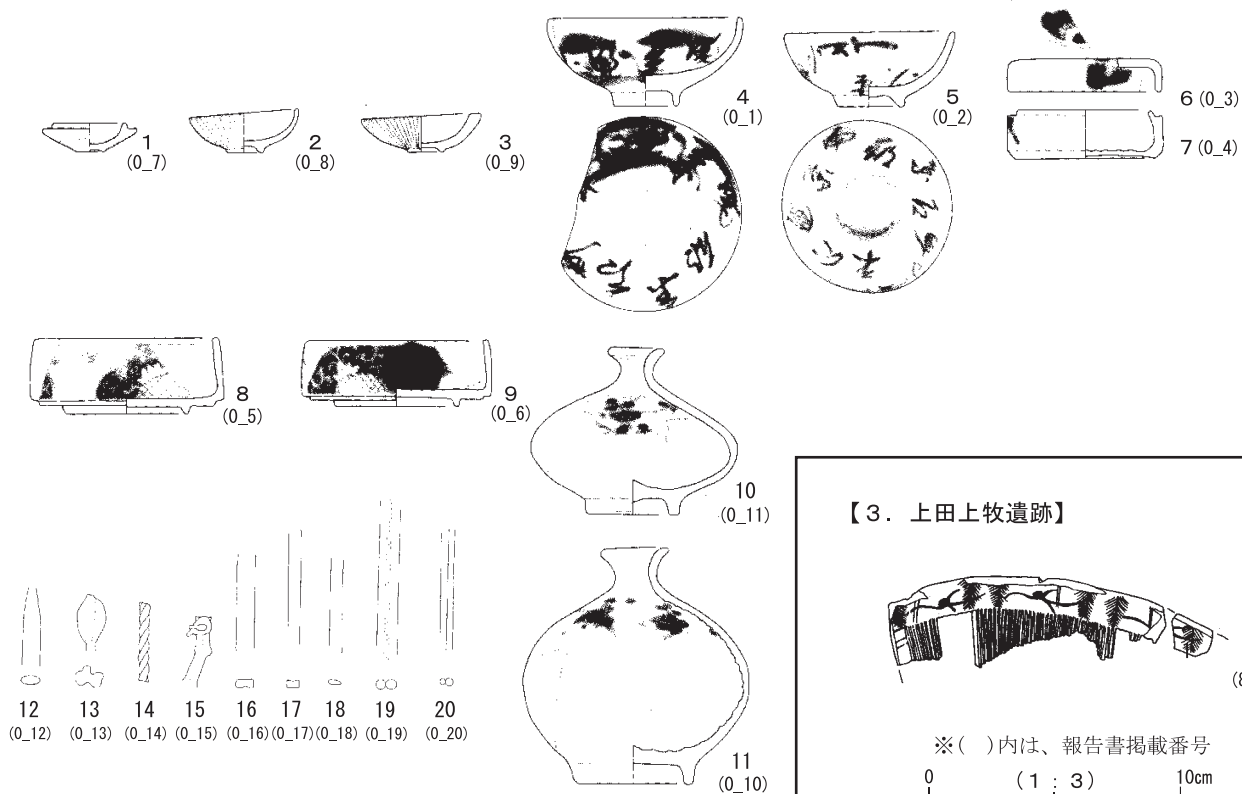
- ①中畑遺跡 ②特別史跡彦根城跡
③上田上牧遺跡 ④膳所城下町遺跡

図1 対象遺跡地図

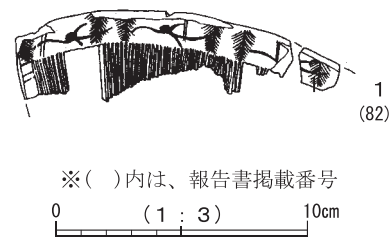
【1. 中畑遺跡】



【2. 特別史跡彦根城跡】



【3. 上田上牧遺跡】



※()内は、報告書掲載番号

図2 滋賀県内出土の江戸時代の化粧道具(1)

【4. 膳所城下町遺跡】

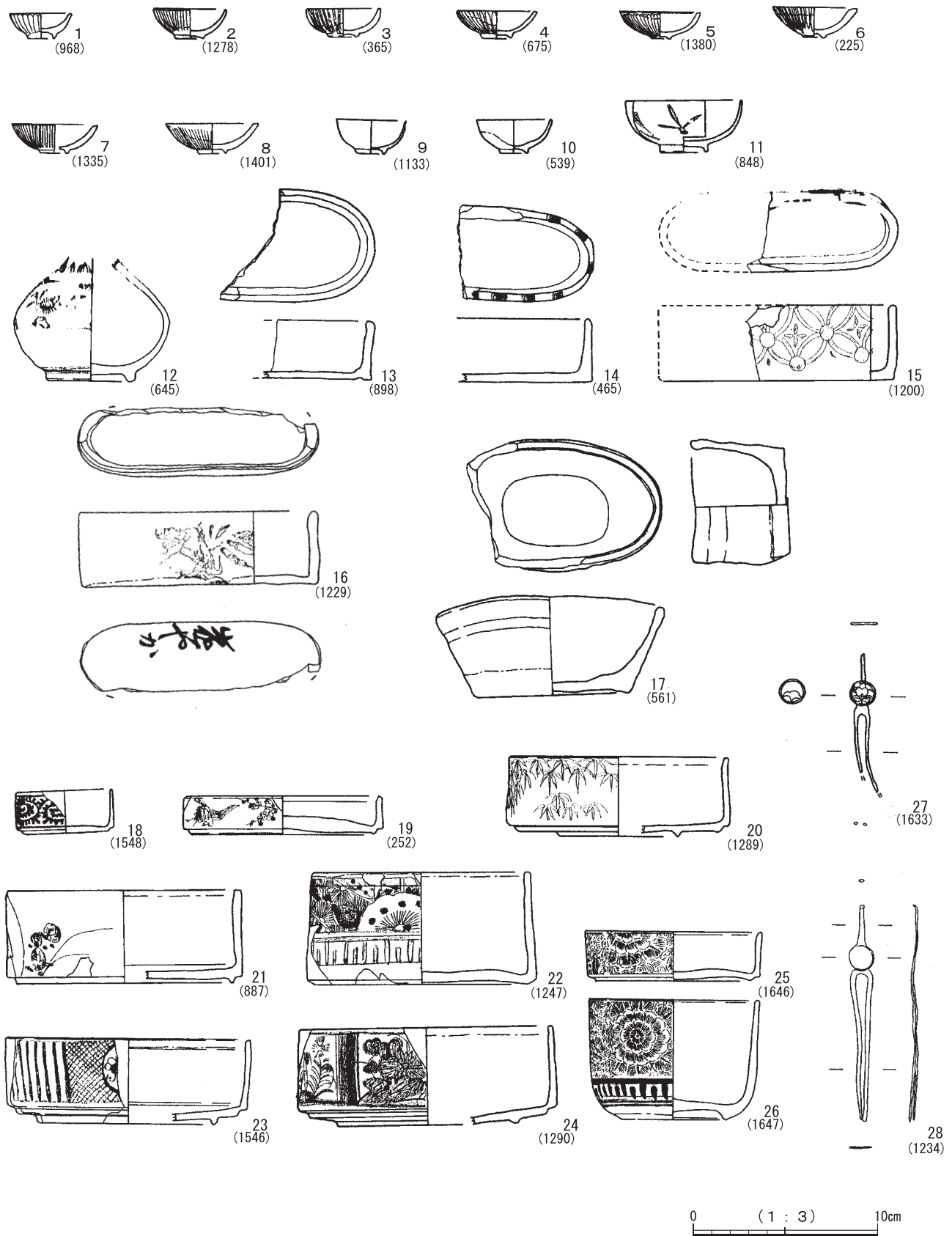


図3 滋賀県内出土の江戸時代の化粧道具（2）

※（ ）内は、報告書掲載番号

いの低地から高所へ村内を順次移転した農村集落がみつかった。ここに暮らしていた農民は、文献資料から考えると、土地を持ち農業の自立経営ができていた、自作の中農層である本百姓であったと考えられる。

18世紀後半頃に屋敷地にあった石組井戸の底部から、廃棄された金蒔絵（松文）が描かれた飾櫛（1）が1点出土している。

（4）膳所城下町遺跡（大津市膳所）（図3）

調査地点は下級家臣の侍屋敷が立ち並んでいた地帯である。屋敷地割は、17世紀後半以降のものである。19世紀には藩校である遵義堂が建設されることから、屋敷地が再整備された遵義堂の敷地以外は、引き続き居住地として利用されていたことが判明している。

（1～10）は、肥前産の押型成形の紅皿である。18世紀初頭頃から19世紀前半頃にかけてのものである。（11）は、赤絵が上絵付けされた、肥前産磁器の紅皿である。18世紀後半頃のものである。（12）は、色絵染付磁器の油壺である。17世紀後半から18世紀初頭頃にかけてのものである。（13～17）は鬘水入れである。（13・14）は、全体に透明釉が施された土師質のものである。（15・16）は、京信楽産と考えられる陶器のものである。（17）は、底部を除いて鉄釉が塗布されている陶器のものである。共伴する遺物から年代を推測すると、（13）は18世紀後半頃、（14）は19世紀中頃、（15）は17世紀後半から18世紀頃、（16）は18世紀代、（17）は17世紀後半から18世紀初頭頃となる。

（18～26）は段重である。（18～20・23・24）は、染付磁器で、このうち（18・23）は肥前産である。（25・26）は磁器のもので、外面に型紙刷りで文様を施文する。（21）は、透明釉が施された陶器製のものである。共伴する遺物から年代を推測すると、（19・20・24）は19世紀、（21）は18世紀後半頃、（25・26）は19世紀後半頃となる。

（27・28）は、青銅製の平打簪である。先端が耳かき状になっている。平打簪は季節を問わずに使われた簪で、一般庶民の女性も使ったが、武家階級の女性が主に用いたものである。

4. おわりに

中畑遺跡には、旅籠の経営者の家族、もしくは旅籠で働く奉公人たちが住んでいた可能性がある。当時のあこがれであった高級化粧品である「小町紅」を所有し、華やかで立体的なデザインの飾櫛を愛用するなど、ここに住んでいた女性たちは、都会的な人物であったと推定できる。

上田上牧遺跡には、日常的に紅や白粉といった化粧品を使用しない農家の人たちが居住していた。当遺跡からは、松葉が描かれた素朴な金蒔絵の飾櫛が1点出土している。農作業のほかに家事労働や育児・介護など、休む暇もないほど働かなければならなかった農家の女性も、飾櫛を挿して

お洒落を楽しんでいたことが想像できる。

特別史跡彦根城跡の上級武士の屋敷地からは、高価な「小町紅」のほかに、比較的高価であったと考えられる、ガラス製の簪が出土している。また、白粉用の段重は、全て華やかな色絵付けが施された良質の磁器製であった。上級武士の妻女は、こうした高級品を普段から使用できる裕福な女性たちであったようである。

膳所城下町遺跡の下級武士の屋敷地の出土遺物をみると、紅皿は肥前産の押型成形のものが多く、簪は青銅製の小振りのものであった。段重の素材は、磁器染付以外に土師質や京信楽系で、シンプルなデザインであった。これらの遺物は、特別史跡彦根城跡の上級武士の屋敷から出土したものと比較すると、価格が安く実用的なものが多い。

資料が少ないため、断定はしづらいが、滋賀県内の各遺跡から出土した化粧道具を通して、そこに居住した女性たちの経済的な格差について、その一端を垣間見ることができたと考える。

文献一覧

- 角谷江津子(2011)「京小町紅」『江戸遺跡研究会編 江戸時代の名産品と商標』吉川弘文館
- 菊池ひとみ(2015)『江戸の暮らし図鑑』東京堂出版
- 九州近世陶磁学会(2000)『九州陶磁の編年』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2000)『上田上牧遺跡Ⅲ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2002)『中畑遺跡Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2005a)『出土文化財資料化収納業務報告書Ⅱ-1』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2005b)『膳所城下町遺跡』
- 高橋雅夫(1988)「江戸時代の化粧書」『江戸時代の芸能と文化』吉川弘文館
- 竹内誠監修・市川寛明(2004)『地図・グラフ・図解でみる一目でわかる江戸時代』小学館
- 露木宏(2019)『ビジュアル版詳説 日本の宝飾文化史』東京美術
- 露木宏・宮坂敦子(2020)『すぐわかる日本の装身具』東京美術
- 山村博美(2000)「江戸時代の化粧」『江戸遺跡研究会編 江戸文化の考古学』吉川弘文館

挿図典拠

- 図1 田中作成
- 図2 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2000・2002・2005a から転載
- 図3 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2005b から転載

（たなか さきこ：調査課 副主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.35 2022.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages